

日本における
イタリア
2001
ITALIA IN
GIAPPONE



日伊文化資料展示会

「日本におけるイタリア2001年」を記念して



京都外国語大学附属図書館
京都外国語短期大学附属図書館
2001



表紙

中央 バルプス『カトリコン』表紙(1470)
右上 マリーニ『イエズス会布教録』(1663)
左上 カルディン『日本の花束』(1646)
右下 バルプス『カトリコン』(1470)
左下 ロッシ『世界地図帳』(1669-1687)

日伊文化資料展示会

—「日本におけるイタリア2001年」を記念して—

と き：平成13年10月23日(火)～平成13年10月29日(月)

午前10時～午後6時(日曜開館)

ところ：京都外国語大学国際交流会館6階

ユニバーシティギャラリー

京都外国語大学附属図書館
京都外国語短期大学附属図書館

2001

ごあいさつ

今年もまた展示会の時期になりました。昨年のテーマであったオランダが蘭学を通して近代日本の礎を築いたのと同じような関係はイタリアと日本の関係にはありません。かといって、両国の接点がまったくなかったわけでもありません。まず、13世紀に一人の商人が中央アジア、中国に紀行した際の旅行記はヨーロッパ人の東洋への関心を高めることになりました。その人の名はマルコ・ポーロといい、その見聞録の中で日本がジパングと呼ばれていることはよく知られています。このマルコ・ポーロはれっきとしたイタリア人でした。余談になりますが、ジパングとは黄金の国の意味ではなく、中国語での発音Riben Quo（リーペンクオ、「日本国」の意味）がその由来とされています。

時代が下って嘉永6年（1853年）のペリーの浦賀来航から15年、安政5年（1858年）のハリスとの日米修好通商条約調印からわずか10年で、2世紀半つづいた徳川幕府が瓦解し、明治新政府が発足しましたが、実は慶応2年（1866年）に日伊修好通商条約が江戸で調印されていたのです。このような通商をイタリアが求めてきた動機は「蚕（かいこ）」にありました。というのは、1850年代の終わりから60年代初頭にかけてヨーロッパでは毎年蚕卵に悪疫が発生し、中でも絹産業が売り物だった北イタリアは、特に手痛い打撃を受けていたからです。そこで、日本産の種紙（蚕が卵を産みつける台紙）の質の良さを高く評価していたイタリアは日本との通商条約締結にふみきりました。そのとき通商使節として来日した海軍中佐ヴィットリオ・アルミニヨンは見聞録を著し、幕末の日本の様子をかなり好意的に紹介しました（1869年、ジェノヴァ出版、訳書は大久保昭男『イタリア使節の幕末見聞記』、昭和62年、新人物往来社）。

このような131年前の日本の社会と人間についての観察記録は今日でも示唆に富むところが多くあるでしょうが、両国の関係はもっと今日的に捉える必要があると思われます。以前のような一国対一国の図式だけではなく、世界は一つというグローバル社会の中での相互の良好な関係の構築が必要だということです。ちょうど日本のプロサッカー選手がイタリアのみならず他国にも進出し、またイタリア食文化の代表格のパスタ（スパゲティ、マカロニ）やピザが日本のみならず他の多くの国の食文化に取り入れられているようにです。と同時にギリシャ、ローマの古典の復興を契機として全ヨーロッパの芸術、思想の発展と向上を促し、人間中心の近代文化への転換の端緒を成したあのルネサンスの源流を生んだ国、そして天体望遠鏡を発明しコペルニクスの地動説を裏付ける観察をしたガリレオ、さらにシェイクスピア（英）、ゲーテ（独）と並び世界三大文豪と称されるダンテ、万能人間のようなレオナルド・ダ・ヴィンチ等の世界的偉人を生んだ国、このイタリアを今一度正しく意識し、正しく認識することも今後の両国の良好な関係づくりに繋がって行くのではないのでしょうか。

この展示会には、上記ダンテの『神曲』の緻密な注釈付きの1497年版、『聖書』のラテン語印刷版（1475年）、アルキメデスの業績のラテン語注釈本（1558年）、ガリレオ新星に関する論争の書（1655年）、さらにはダンテの『神曲』に対して「人曲」と賛美されるボッカッチョの『デカメロン』1527年版など本学図書館所蔵の貴重書多数が展示されています。この展示会を機会に、一人でも多くの方が、観光やファッション以外のイタリアの文化面に関心を持っていただければ主催者側にとってこれに優る喜びはありません。

最後になりましたが、この展示会開催にご尽力下さった多くの方々に心から感謝いたします。行き届かぬ点がございましたら、ご教示を賜りますようお願い申し上げます。

平成13年10月

京都外国語大学附属図書館
京都外国語短期大学附属図書館
館長 上野 義和



De imitatione Christi

KEMPIS, Thomas a

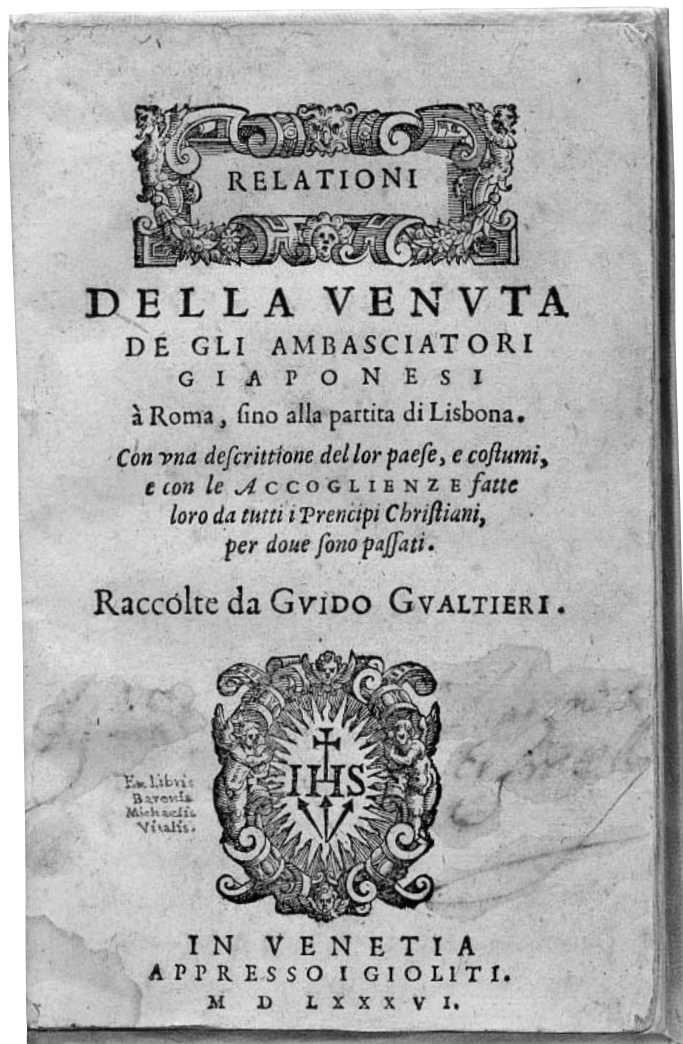
Venezia : 1483

ケンピス『キリストに倣いて』

トマス・ア・ケンピス (Thomas a KEMPIS, 1379-1471) は、ドイツのケルン司教区に属する町ケンペンで生まれた神秘主義者で、早くから共同生活の兄弟団とよばれる修道会に入り、敬虔な修道士として生涯を神に捧げた。

本書は、聖書について最も広く読まれてきた中世のキリスト教信心書である。もともと修道者を対象に書かれたものであるが、一般信徒にも愛読され、今日なお、キリスト教徒の内面生活を語る古典的名著の一つに数えられている。内容は「霊的生活の有益なる勧め」、「内的生活の勧め」、「内的慰安について」、「聖体に関する敬虔な勧告」の4部からなっているが、その根本理念はキリスト教的完徳への道を示すものであり、世俗の軽視・苦行・克己・献身・聖体拝領の勧めなどである。

初版は1473年に出版されたが、本書は1483年にヴェネツィアで出版されたものである。現在では、ほとんどすべての言語に訳されており、その意味では世界文学に属するといえよう。最初の邦訳は、1596 (慶長元) 年に当時の宣教師によって『コンテンツスムンチ』なるラテン語原文 (Contemptvs Mvndi) そのままの書名でキリシタン版が出版されている。



Relationi della venuta degli ambasciatori giapponesi

GUALTIERI, Guido

Venetia : 1586

グアルティエーリ『天正遣欧使節記』

グイード・グアルティエーリ (Guido GUALTIERI, 1560-1636) は、イタリアの文学者で、ローマ法王シクストゥス5世の側近として活躍した人物である。

本書は、日本の天正遣欧使節の一行がローマへ到着し法王グレゴリオ13世との謁見の後にリスボンに向けて出発するまでが記されている。これは同使節のヨーロッパでの様子を書いて各地で出版された数多くの小冊子に属するものであるが、他の小冊子に比べて内容的には最も正確でまとまっているものである。なお、本書は1586年にヴェネツィアで出版されているが、初版は同じ年にローマで出版されている。



[Materials concerning Japan]

Companhia de Iesus

1587-1623

『日本関係 イエズス会文書』

第一文書：1587年8月5日付

第二文書：1587年10月1日付

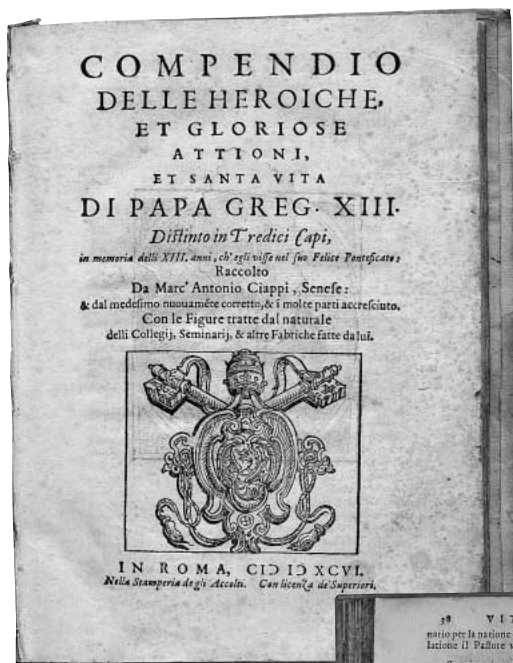
第三文書：1622年9月6日付

第四文書：1623年6月10日付

ポルトガル南部で発見されたこれらの古文書は、16世紀から17世紀に我が国においてキリスト教の布教に携わったルイス・フロイス (Luís FRÓIS, 1532-1597) をはじめとする4人の宣教師が、当時の日本の現状をイエズス会本部や上司に宛てて書き送った報告書と請願書の原文である。特に第二文書は、イエズス会司祭アントニーノ・プレネステイーノ (Antonino PRENESTINO, 1543-1589) が、上長の書記であるフロイスに宛てた書簡である。

プレネステイーノはイタリアのポリステーナに生まれ、メッシーナで学び、1566年にイエズス会に入った。1574年にはヴァリニャーノ (Alessandro VALIGNANO, 1530-1606) と共にインドに向かい、ゴア、マカオを経て1578年来日した。1586年より上方で布教活動を行ったが、1587年に秀吉がキリシタンに対する迫害を始めたので平戸に移った。そして1589年に人文学を教えるためにマカオに派遣され、同地で没した。

本書簡は高山右近の追放と都地方に関する状勢を彼が平戸に移ってからしたためた報告書で、ポルトガル語で書かれている。彼が後にほぼ同じ内容をイタリア語で書いたものと、フロイスがイスパニア語で写したものはローマのイエズス会文書館にある。



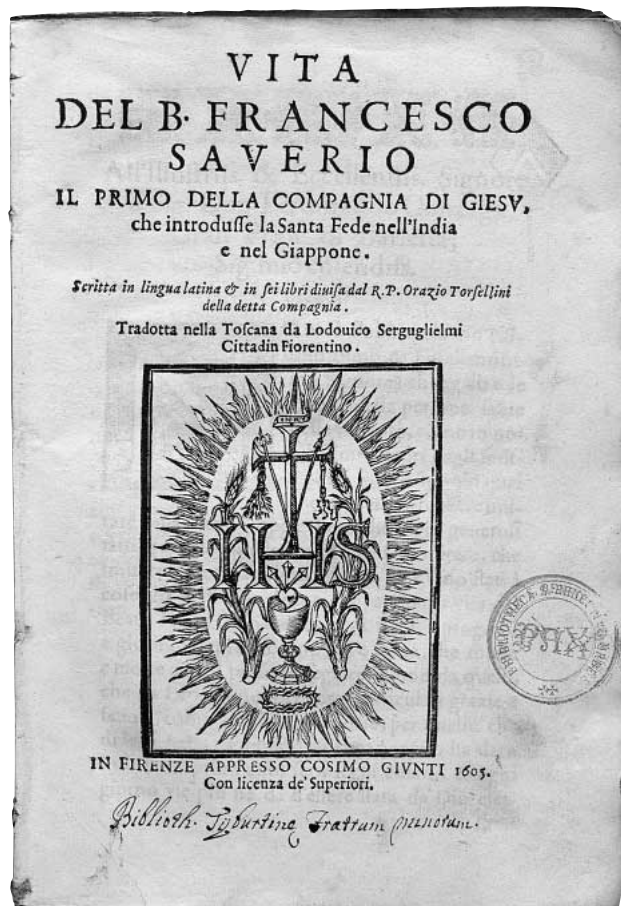
Compendio delle heroiche et gloriose attioni, et santa vita di Papa Greg. XIII

CIAPPI, Marc[o] Antonio

Roma : 1596

チャップ 『教皇グレゴリオ13世偉業要略』

マルコ・アントニオ・チャップ（Marco Antonio CIAPPI, 16世紀後半）の著書『教皇グレゴリオ13世偉業要略』は幾度か版を異にして刊行され、本館にも3種が見出される。そのうち1596年のローマ刊行の一書は、30余の木版画を掲げており特に注目される。木版画の中にはグレゴリオ13世の方針に沿って建てられた安土と有馬の二つの神学校（セミナリオ）と臼杵の修練院（ノビシアド）、府内（大分）の学院（コレジオ）、イエズス会が日本に作った建築物と、伊東マンショ（1570?-1612）ら、いわゆる天正遣欧使節の教皇謁見図があって日本人には親しみ易いものがある。



Vita del B. Francesco Saverio

TORSELLINI, Orazio ; SERGUGLIELMI, Lodovico (tr.)

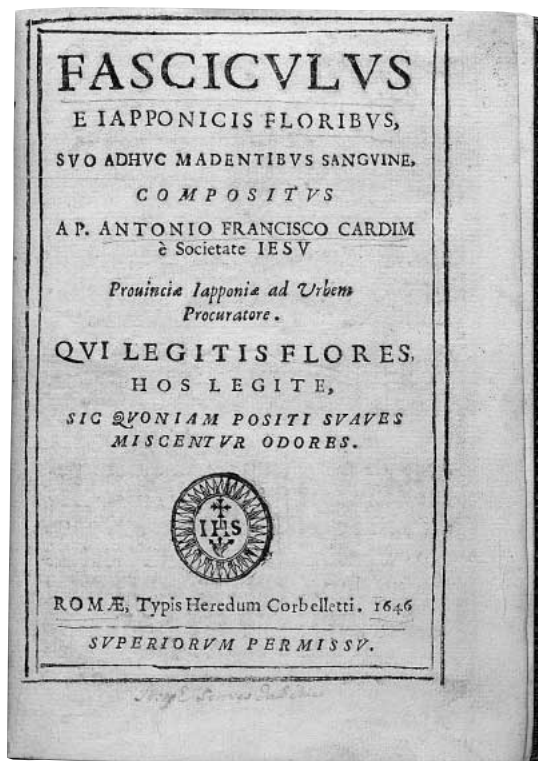
Firenze : 1605

トルセリーノ 『聖ザビエルの生涯』

著者オラツィオ・トルセリーノ（Orazio TORSELLINO, 1545-1599）はローマで生まれ、1562年にイエズス会士となった。その後22年間もローマのコレジオで教鞭を執り、晩年は、フィレンツェやロレートの神学校の校長として、一生を教育活動に捧げた。

本書はラテン語の原典からイタリア語に訳された初めてのものである。『聖ザビエルの生涯』は1596年に原典がローマで出版されてから、多くの言語に翻訳された。本書の翻訳はロドヴィコ・セルグリエルミ（Lodovico SERGUGLIELMI）によるものであるが、題名紙に記されているように「フィレンツェの市民」だった事以外何も知られていない。

本書は6章から成っており、第1章はザビエルの性格、教育、ロヨラとの出会い及びイエズス会の発足について、第2章はインドへの出発、ゴア近辺での布教について、第3章はマラッカでのAngero（アンジロー）との出会いから日本行きを決心して到着するまで、第4章は日本での布教、第5章はインドへ戻り、中国行きを決心し、死ぬまでのことについて、第6章はあとがきとザビエルの奇蹟について記されている。



Fasciculus e japonicis floribus

CARDIM, Antonio Francisco

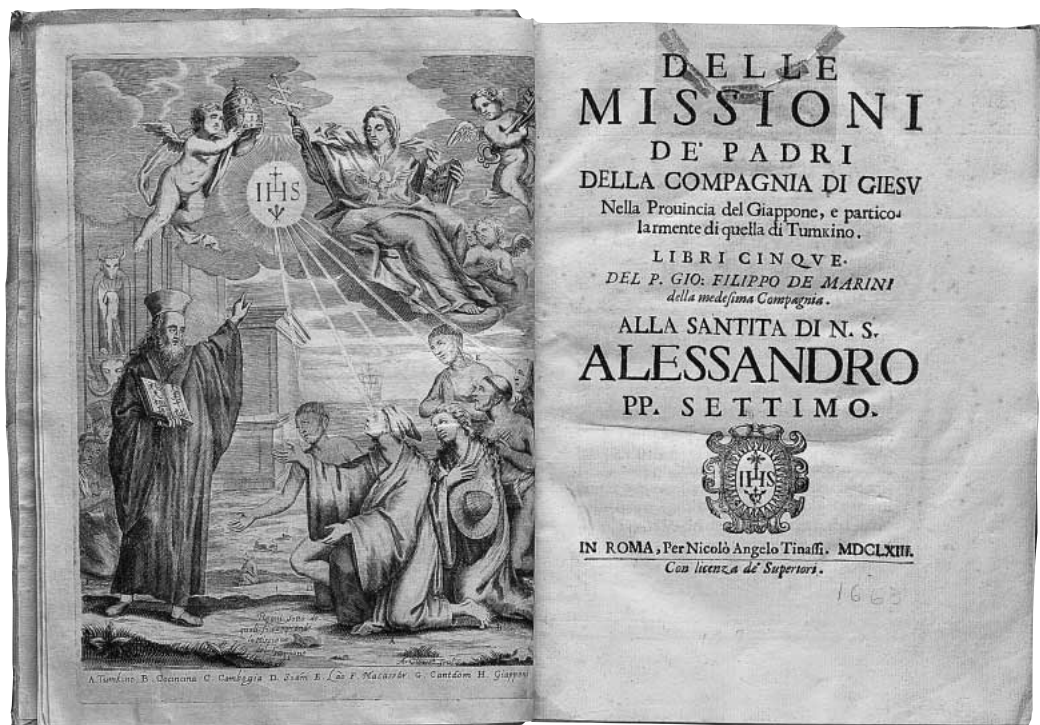
Roma : 1646

カルディン『日本の花束』

ポルトガルのエヴォラ近くのヴィアナ・ド・アレンテージョに生まれたアントニオ・フランシスコ・カルディン（Antonio Francisco CARDIM, 1596-1659）は15歳でイエズス会に入り、インドを始めとしてアジア各地での布教活動を経て、1645年頃に日本管区長に任命された。

本書は全3篇に分かれており、第1篇では書名にあるように、日本で華々しく殉教した人々を花束にたとえてフランシスコ・ザビエル以降の布教史が、殉教したイエズス会士84名の伝記や大村純忠・大友宗麟・高山右近などのキリシタン大名の伝記と共に書かれている。第2篇は、カルディンが知り得た1557年から1640年までの一般信者の犠牲者を収録した犠牲者名簿である。さらに第3篇は1640年のマカオ使節の殉教始末が記されたものである。

なお、カルディンは日本管区長に就いた年に一旦ローマに戻り、本書を刊行した後にポルトガルで東洋布教のための宣教師を募った。その後、再びマカオに戻って1659年に同地で没した。



Delle missioni de' padri della Compagnia di Giesu

MARINI, Gio. Filippo de

Roma : 1663

マリーニ『イエズス会布教録』

ジョバンニ・フィリッポ・デ・マリーニ (Giovanni Filippo de MARINI, 1608-1682) はイタリアのタッジアに生まれた。1625年にイエズス会に入り、東洋での布教を志して1638年にインドに渡った。その後、トンキンで14年間伝道し、更にマカオにも赴き同地のイエズス会コレジオの学長も務めた。一時ヨーロッパに戻り、1674年には東洋管区長として赴任し、1682年にマカオで没した。

マリーニがインドに赴任した頃の日本は既に厳しい禁教令下にあり、マリーニも日本に渡来したことは一度もなかった。本書の表題紙には「日本及びトンキンにおけるイエズス会士の布教」となっているが、日本に関する部分は極めて少なく、殆どが当時日本管区の中に含まれていたトンキンやシャム（現在のタイ）などでのイエズス会士による布教活動についてである。

本書はローマで刊行された初版本である。巻末にある折りたたみ式の挿し絵は大変珍しく、銀色の花模様の入った黄色の紙に印刷されている。1665年には三種の新しいイタリア語版が、翌1666年にフランス語版抄本が相次いで出版されたことなどから、当時のヨーロッパにおいて本書が高く評価されていたことが推察できる。



**Vita del venerabile servo di Dio F. Angelo Orsucci
dell' ordine de' predicatori**

SESTI, Lodovico

Lucca : 1682

セスティ『尊者アンジェロ・オルスッチの生涯』

アンジェロ・オルスッチ (Angelo ORSUCCI, 1573-1622) はイタリアのルッカに生まれた。14歳でドミニコ会に入り、17歳で修道士となった。ローマのミネルヴァ修道院で修養し、1602年の4月に布教のためにフィリピンのマニラに渡った。そしてルソン島の北のカガヤンに送られた後、バタン諸島に移り、そこで日本への布教に対する野望を燃やし続けていた。1618年の8月12日に変装して長崎に潜入したが、日本での布教は困難を極め、12月13日には他のキリシタンと共に捕らえられ、大村の牢に幽閉された。そして1622年9月10日の長崎での大殉教の際に、同じくイタリア出身のイエズス会士スピノラ (Carlo SPINOLA, 1564-1622) らと共に火刑に処せられ、彼の遺灰は海に流された。その後、1867年7月7日にピウス9世によって列福された。

本書は三つの章から成り、第1章にはオルスッチの出生と家系ならびに日本に来るまでの彼の半生について、第2章には日本におけるキリスト教の布教状況と彼の日本到着および監禁と死について、第3章にはオルスッチの殉教に関することが書かれている。

なお著者セスティ修道士 (Lodovico SESTI) については詳しいことは不明である。

**DIZIONARIO
ITALIANO,
LATINO E FRANCESE,**

IN CUI SI CONTIENE, NON SOLAMENTE

UN COMPENDIO DEL DIZIONARIO DELLA CRUSCA,
*ma ancora tutto ciò, che s'ha di più rimmarchevole ne' migliori Lessicografi,
Etimologifti, e Glosfarj, usciti fin ora alla luce in diverse lingue;*

RACCOLTO DALL' ABBATE

ANNIBALE ANTONINI.

NUOVA EDIZIONE.

Riveduta, corretta, e notabilmente accresciuta.

TOMO PRIMO.



IN LIONE,

Appresso PIETRO DUPLAIN, Primogenito, Librajo,
Strada Merciere.

M. D C C. L X X.

CON APPROBAZIONE E PRIVILEGIO DEL RE.

Dizionario italiano, latino e francese

ANTONINI, Annibale

Lione : 1770

アントニーニ『伊・羅・仏辞典』

アンニバレ・アントニーニ (Annibale ANTONINI, 1702-1755) は南イタリアのカンパーニャ州サレルノ近辺の町で生まれた。勉学のため兄のジュゼッペと共に、当時文化的に栄えていたナポリに行った。1722年にローマに暫く滞在した後、ドイツ、オランダ、イギリスなどのヨーロッパ諸国を旅行して、1726年からパリに住み、そこで約25年もの間イタリア語を教えた。1750年には若きころの勉学の地ナポリへ戻り、1755年の8月に同地で没した。

本書は、彼がパリに在住の時に執筆されたもので、初版は1735年にパリで出版された。アントニーニは数ヶ国語に通じ、著書には本書のように辞書類や、長年イタリア語の教鞭を執っていたことから多くの文法書などもある。



Catholicon

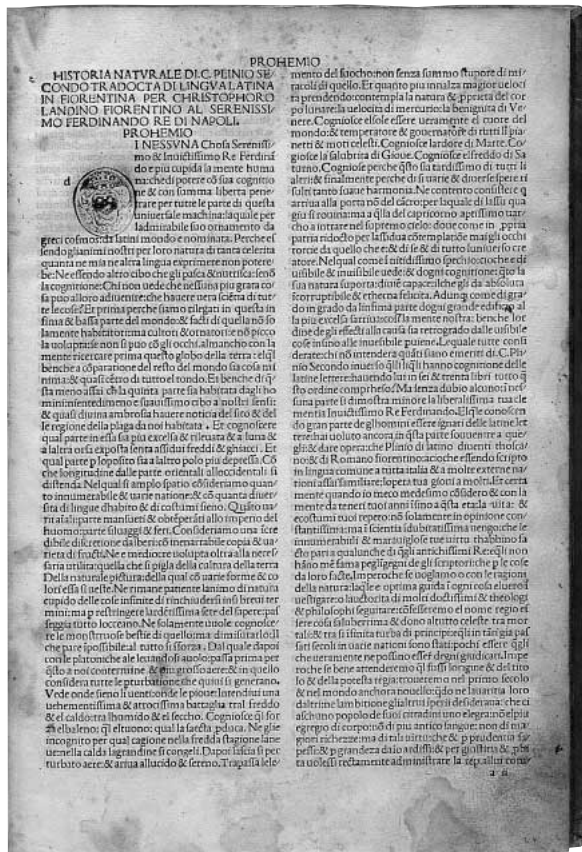
BALBUS, Joannes
Strasburg : [1470]

バルブス『カトリコン』

カトリコンとは、本来は「万能薬」の意味であるが、あらゆる病気や心の不満を癒すための実用辞典として使われていた。原本は1286年にイタリアのドミニコ会の修道士ヨハネス・バルブス（Joannes BALBUS）が多くの資料に基づいて編集したもので、ラテン語文典に神学辞典が付されており、しばしば書写されて広く民間に流布し愛用された。

カトリコンが初めて印刷されたのは、1460年に活版印刷術の発明者ヨハネス・グーテンベルク（Johannes GUTENBERG, 1400-1468）によってである。今日残っている15世紀に印刷された『カトリコン』は、グーテンベルクや本書の印刷者のアドルフ・ルッシュ（Adolf RUSCH）など22種ほどある。当時相当な需要があったことは、充分理解することができよう。

なお、装丁はイギリス19世紀初期のもので、檜の板を教会の窓や尖塔を思わせる形に浮き彫りにして、紺のモロッコ皮を張り金箔を押している。いわゆるcathedral bindingの優れた一例として、この展示目録の表紙に使われている。



Historia naturale

PLINIUS

Venesia : 1489

プリニウス 『博物誌』

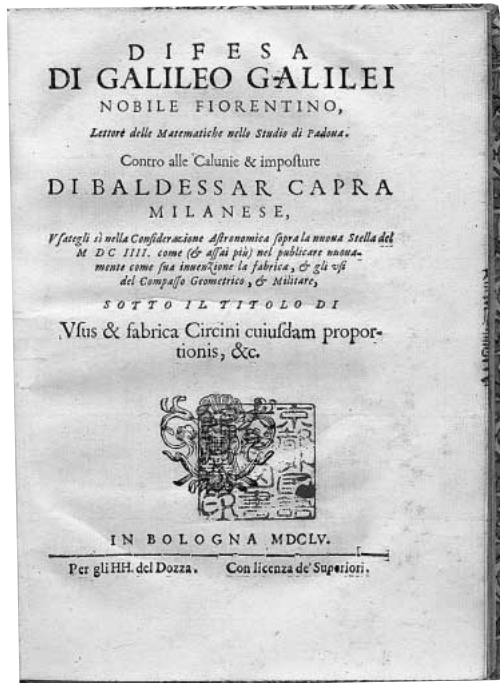
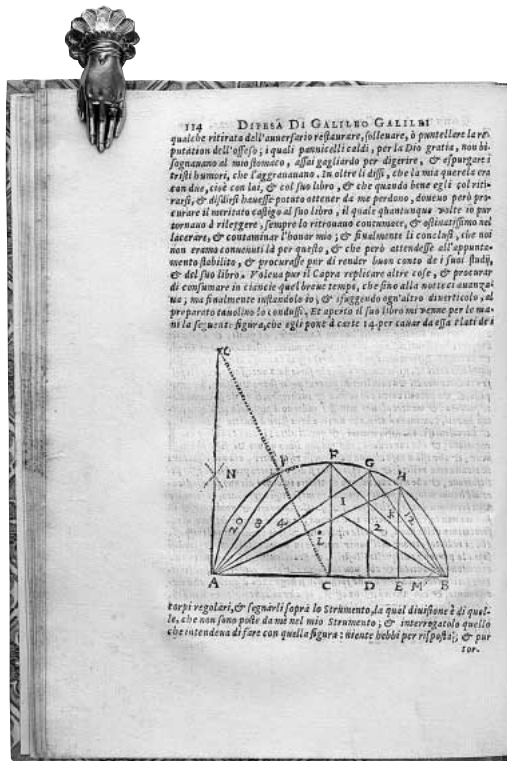
プリニウス (PLINIUS, 23?-79) は古代ローマ帝国の政治家、著述家で、北イタリアのコーム (現在のComo) に生まれた。首都ローマで騎士の教育を受け、ゲルマニアで騎兵士官として勤務し、後のティトゥス帝 (39-81) とも交際があった。学問、ことに博物学に関心が深く、ネロ帝 (37-68) の頃引退し著述生活に入ったが、後に政務官として活躍した。

現存する『博物誌』は、古代ギリシアよりローマに至る2千冊以上の書物より諸種の事項約2万件を抜書して集めた一種の百科事典的な書物で、完成後ティトゥス帝に捧げたとのことである。

本書はラテン語版よりクリストフォロ・ランディノ (Christoforo LANDINO) がイタリア語に訳したもので、第3版 (初版本は1476年) である。

プリニウスは自然科学者ではなかったので、観察や記述に学問的正確さを欠く箇所も見られるが、よく整理された知識が記載されていることから古代研究には不可欠の資料といわれている。

このイタリア語版が出版された当時のヨーロッパは、ルネサンスの最盛期であり、本書が古代研究の復興に果たした役割は少なくなかったことが伺われる。



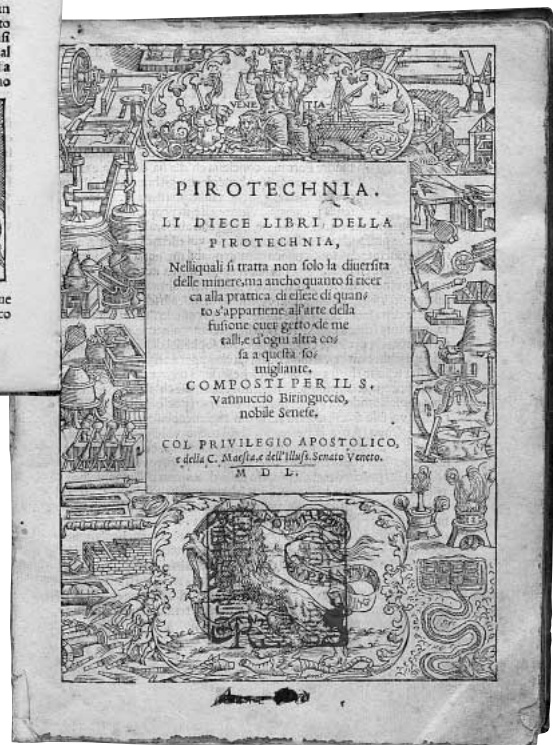
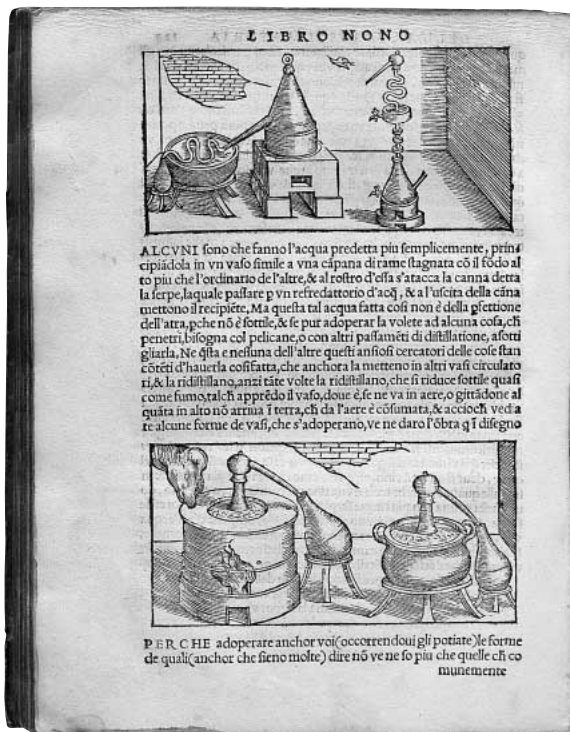
Difesa di Galileo Galilei contro alle calunie & imposture di Baldessar Capra

GALILEI, Galileo
 Bologna : 1655

ガリレオ『カブラの中傷と欺瞞に対するガリレイの抗議』

ガリレオ・ガリレイ (Galileo GALILEI, 1564-1642) はイタリアのピサ出身の物理学者、天文学者で、ピサやパドヴァの大学で教鞭を執った。彼は1609年に望遠鏡を制作して天体観測を行い、月に山や谷があることや木星に衛星のあることを発見した。このことは、アリストテレス以来の宇宙観に疑問を持たせ、コペルニクスの地動説を確信させる契機となり、当時としては画期的なことであった。

本書『カブラの中傷と欺瞞に対するガリレイの抗議』は、1604年にガリレイ新星（蛇遣い座新星）の出現を発見した時、この新星は月より遙かに遠い位置にあることを幾何学的に証明した。しかし、このことについて科学者の間で論争が起り、バルダッサレ・カブラ (Baldassarre CAPRA, 1580-1626) は、ガリレイの観測が不正確で不完全なものだと反論した。このカブラの反論に憤慨し、ガリレイが数学の講師をしていたパドヴァ大学の評議員に訴え、公判の上でカブラを徹底的に非難した。なお、本書はガリレイの死後1655年にボローニャで出版されたものである。



Pirotechnia

BIRINGUCCIO, Vannuccio

[Venetiz] : 1550

ビリングッチョ『火工術』

ヴァンノッチョ・ビリングッチ (Vannuccio BIRINGUCCI, 1480-1537) は、シエナに生まれ、ローマで没した鉱物学者である。ドイツを旅行した時に採鉱冶金の知識を得て、1538年に教皇パウロ3世の命を受け、大砲の鑄造と火薬の製造に従事した。彼は錬金術のそれまでの誤った見解を否定し、実験の結果に基づいて考察した最初の真の化学者の一人といわれている。

本書は、16世紀イタリアにおける火工術ハンドブックであり、冶金学の最も初期の古典で当時の知識と技術を包括している。こうした本書は当時のヨーロッパに於いて、フランス語や英語に翻訳されて広く利用されていた。初版は1540年にヴェネツィアで出版された。



Comedia del divino poeta

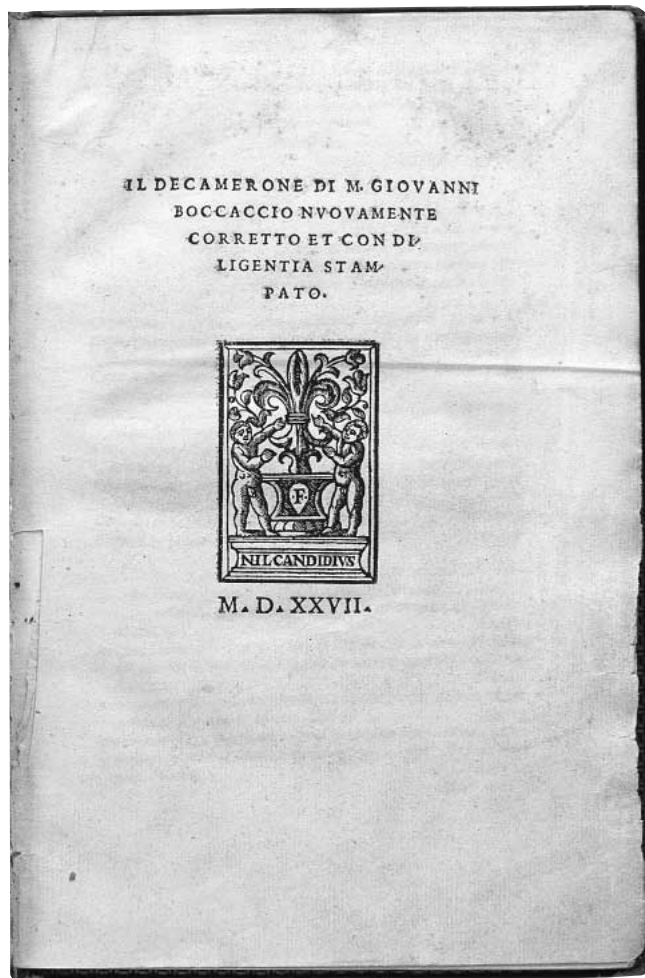
ALIGHIERI, Dante

Venetia : 1497

ダンテ『神曲』

ダンテ・アリギエーリ (Dante ALIGHIERI, 1265-1321) はフィレンツェに生まれ、フィレンツェ、ボローニャで修辞学を修めたが、古典作家では特にヴェルギリウスを好んでいたようである。イタリア各地の宮廷を流浪して、帰路途中病に倒れラヴェンナで没した。

イタリア文学史上最大の傑作といわれるこの『神曲』は、古典ギリシア・ローマの世界的視野と中世的世界観とが見事に融合された一大叙事詩である。本書は、15世紀に印刷術が普及され始めた頃の印刷本であり、ルネサンス期の人文主義者ランディーノの注釈付きである。この注釈本の初版は、1481年にフィレンツェで出版されたが、本書は更に入念に校訂がなされ、1497年にヴェネツィアで出版されたものである。注釈はルネサンス期の『神曲』解釈であり、現代のそれに比べると極めて特殊な内容を持っているが、当時の思想と文化を知る上でも重要な文献であると言われている。



Il Decamerone

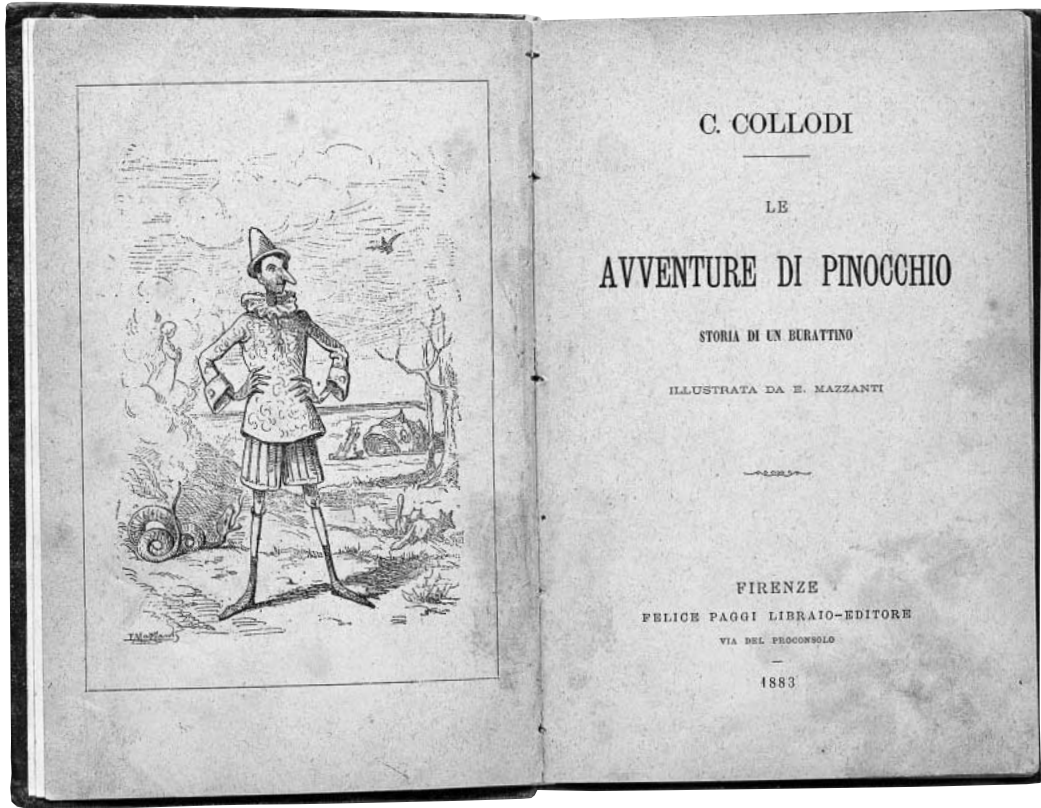
BOCCACCIO, Giovanni

[Firenze] : 1527

ボッカッチョ『デカメロン』

ジョバンニ・ボッカッチョ（Giovanni BOCCACCIO, 1313?-1375）はフィレンツェで生まれ、フィレンツェで没した。裕福な商人であった父親は、商業の見習いのため1327年に彼をナポリに行かせた。当時のナポリは文化的に栄えており、ボッカッチョはそこで文芸を志し、1341年にフィレンツェに戻った。

『デカメロン』は1349年から1353年頃にかけてフィレンツェで執筆され、1469-1470年にフィレンツェで刊行されたと考えられている。本書は100篇の物語から成り、14世紀のイタリアの生活を余すところなく描き出したルネサンス文学の代表作の一つである。ダンテの『神曲』に対して「人曲」と呼ばれ、ボッカッチョは自然主義文学とイタリア散文小説の父とも呼ばれている。ちなみに本書は、1527年にジュンダ家によって印行されたもので、一般に「1527版」と呼ばれている。



Le avventure di Pinocchio

COLLODI, C.

Firenze : 1883

コッローディ 『ピノッキオの冒険』

カルロ・コッローディ (Carlo COLLODI, 本名Carlo LORENZINI, 1826-1890) は、フィレンツェ生まれの19世紀イタリアを代表する児童文学作家である。筆名は、彼の母の出身地トスカーナ州のコッローディ村に由来する。

ピノッキオは、1本の丸太から作られた操り人形であり、当時のイタリア文化を反映して民衆笑劇としての伝統が生きている。この物語はその後、フランス、ドイツ、ロシアへと広がり、ウォルト・ディズニー (Walt DISNEY, 1901-1966) にも大きな影響を与えた。

『ピノッキオの冒険』は、最初は子ども向けの雑誌に連載されたものであるが、1883年に1冊の本としてまとめられフィレンツェで出版された。本書は初版本である。



Mercurio geografico overo guida geografica in tutte le parti del mondo

ROSSI, Gio. Giacomo de (ed.)

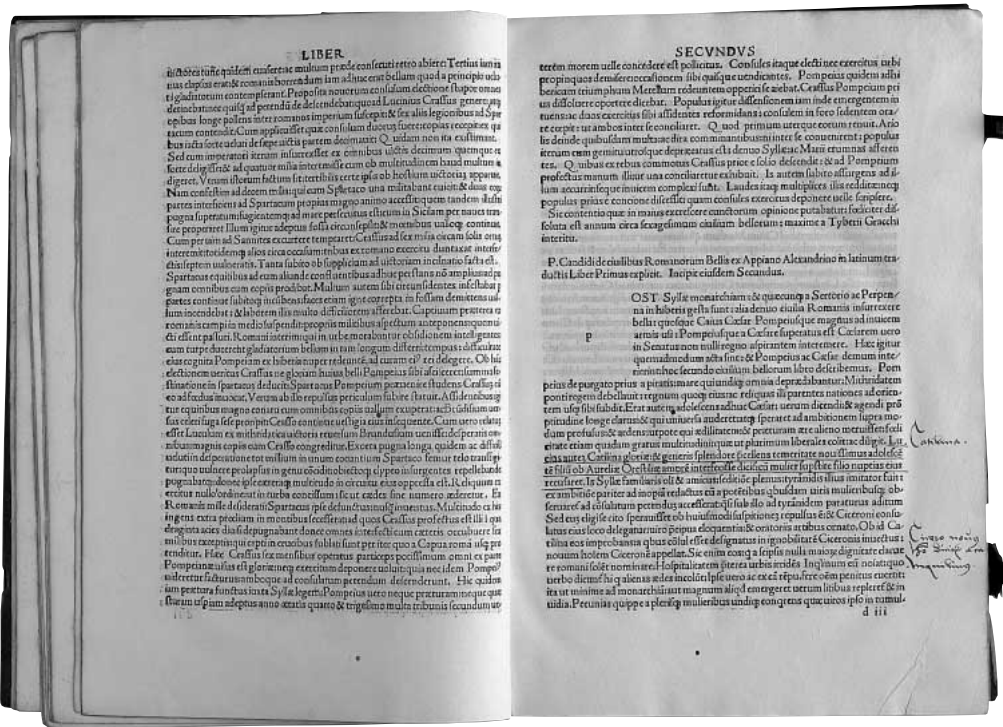
Roma : [1669-1687]

ロッシ編『世界地図帳』

本書はメルキュリオ地理書（世界地理入門）の付属として出版された地図帳で、編者ジョバンニ・ジャコモ・デ・ロッシ（Giovanni Giacomo de ROSSI）は、17世紀のイタリアの出版者である。

本書が刊行された17世紀のヨーロッパは、地理的大発見時代に次ぐ大航海時代であり、アメリカ大陸中部や南部は比較的調査が進んでいたが、北部及びアジアの北東部・オーストラリア大陸などにはまだ未探検の地域が多く、ヨーロッパ人に誤解された箇所が少なくなかった。ルネサンス文化がいち早く開花したのはイタリアであるが、この地図帳が刊行された17世紀中頃以降はスペイン、フランス、オーストリアなどの列強により、国土を分断され、思想も産業も退廃の一途を辿っていた。

当時、オランダではすでにブラウ（Joan BLAU, 1571-1638）の大地図帳が出版されており、本書はそれを参考にしたと思われるものを沢山含んでいる。しかし、新しい平射図法・サンソン図法などによる世界図・大陸図などを掲載している事は、イタリアの地理学界などに与えた影響は少なくない。



De bellis ciuilibus

APIANUS

Venetis : 1500

アッピアヌス『内乱』

アッピアヌス (APPIANUS, 2c) はエジプトのアレクサンドリア生まれのギリシア人の歴史家で、ローマ帝国が建国間もない頃にローマに市民権を得て移り、トラヤヌス帝、ハドリアヌス帝、アントニヌス帝に執政官として仕えた。

本書は、ギリシア語で書かれた彼の主著『ローマ史 Romaika』のラテン語訳である。訳者はクリストフェルム・デ・ペンシス (Christoferum de PENSIS) で、1500年にヴェネツィアで印刷された。全部で24巻であったが、現在では11巻と断片が残っているのみである。その内の6巻はローマの内乱を扱ったものである。

本書ではローマの革命期をとりあげてグラックスの農地法、マリウス、スラの権力争いなど取り上げている。文体も内容も特に優れたものではないが、内乱の時代を記したのものとして貴重な資料といえる。『ローマ史』は後のギボン (Edward GIBBON, 1735-1794) に影響を与えた。

展示目録

日伊文化資料展示会

－「日本におけるイタリア2001年」を記念して－

[稀覯書]

1. Biblia Sacra. Venetiis: 1475.
『聖書（ラテン語）』
(2ページ参照)
2. Biblia Sacra. Venetiis: 1476.
『聖書（ラテン語）』
3. De imitatione Christi: Thomas a KEMPIS. Venezia: 1483.
ケンピス『キリストに倣いて』
(3ページ参照)
4. Relazioni della venuta degli ambasciatori giapponesi: Guido GUALTIERI. Venetia: 1586.
グアルティエーリ『天正遣欧使節記』
(4ページ参照)
5. [Materials concerning Japan]: Companhia de Iesus. 1587-1623.
『日本関係 イエズス会文書』
(5ページ参照)
6. Compendio delle heroiche et gloriose attioni, et santa vita di Papa Greg. XIII: Marc[o] Antonio CIAPPI. Roma: 1596.
チャッピ『教皇グレゴリオ13世偉業要略』
(6ページ参照)
7. Vita del B. Francesco Saverio: Orazio TORSELLINI; Lodovico SERGUGLIELMI (tr.).
Firenze: 1605.
トルセリーノ『聖ザビエルの生涯』
(7ページ参照)

8. Fasciculus e japonicis floribus: Antonio Francisco CARDIM. Roma: 1646.
カルディン 『日本の花束』
(8ページ参照)
9. Delle missioni de' padri della Compagnia di Giesu: Gio. Filippo de MARINI. Roma: 1663.
マリーニ 『イエズス会布教録』
(9ページ参照)
10. Vita del venerabile servo di Dio F. Angelo Orsucci dell'ordine de' predicatori: Lodovico SESTI. Lucca: 1682.
セスティ 『尊者アンジェロ・オルスッチの生涯』
(10ページ参照)
11. Dizionario italiano, latino e francese: Annibale ANTONINI. Lione: 1770.
アントニーニ 『伊・羅・仏辞典』
(11ページ参照)
12. Catholicon: Joannes BALBUS. Strasburg: [1470].
バルブス 『カトリコン』
(12ページ参照)
13. Historia naturale: PLINIUS. Venesia: 1489.
プリニウス 『博物誌』
(13ページ参照)
14. Opera: ARCHIMEDIS. Venetiis: 1558.
アルキメデス 『著作集』
(14ページ参照)
15. Difesa di Galileo Galilei contro alle calunie & imposture di Baldessar Capra: Galileo GALILEI. Bologna: 1655.
ガリレオ 『カブラの中傷と欺瞞に対するガリレイの抗議』
(15ページ参照)
16. Pirotechnia: Vannuccio BIRINGUCCIO. [Venetiz]: 1550.
ピリングッチョ 『火工術』
(16ページ参照)
17. Comedia del divino poeta: Dante ALIGHIERI. Venetia: 1497.
ダンテ 『神曲』
(17ページ参照)

18. 『ダンテ神曲物語』 繁野天来（政璃）編 1903（明治36年）

19. Il Decamerone: Giovanni BOCCACCIO. [Firenze]: 1527.
ボッカッチョ 『デカメロン』
（18ページ参照）

20. 『想夫戀（ボッカス翁十日物語）』 [ボッカス著] カストル仏訳
ビゴ挿絵 1886（明治19年）

21. 『鴛鴦奇観（伊国情史）』 [ボッカチオ著] 近藤東之助訳 1887（明治20年）

22. 『十日物語』 [ボッカチオ著] 水野和一訳 1910（明治43年）

23. Le avventure di Pinocchio: C. COLLODI. Firenze: 1883.
コッローディ 『ピノッキオの冒険』
（19ページ参照）

24. Mercurio geografico ovvero guida geografica in tutte le parti del mondo: Gio. Giacomo de ROSSI (ed.). Roma: [1669-1687].
ロッシ編 『世界地図帳』
（20ページ参照）

25. De bellis ciuilibus: APIANUS. Venetiis: 1500.
アッピアヌス 『内乱』
（21ページ参照）

26. The history of the decline and fall of the Roman Empire: Edward GIBBON. London: 1776-1788.
ギボン 『ローマ帝国衰退史』

27. History of Rome: Thomas ARNOLD. London: [1838-1843].
アーノルド 『ローマ史』

【イタリアにおける日本研究：19世紀～20世紀】

28. Notizie di astrologia giapponese: Antelmo SEVERINI. Genève: [1874].
『日本占星術資料』

29. La via della pieta filiale: Yasumaro OGAWA. Firenze: 1878.
『孝行往来』
30. La mitologia giapponese: Raffaele PETTAZZONI. Bologna: 1929.
『日本神話』
31. La prima ambascieria giapponese in Italia: Beniamino GUTIERREZ. Milano: 1938.
『イタリアへの最初の日本外交使節団』
32. La costituzione nel Giappone: Guglielmo BERCHET. Venezia: 1889.
『日本国憲法』
33. Feste giapponesi: Giovanni de RISEIS. Roma: 1894.
『日本の伝統』
34. Grammatica teorico-pratica della lingua giapponese,...: Pietro Silvio RIVETTA,
Takeo TERASAKI. Venezia: 1911.
『日本のことば』
35. L'arte giapponese al museo Chiossone di Genova: Vittorio PICA. Bergamo: 1907.
『ジェノヴァのキオッソーネ博物館の日本美術』
36. L'incanto sottile del dramma no: Gian Carlo CALZA. Milano: 1975.
『能の魅力』
37. Il taketori monogatari: A. SEVERINI (tr.). Firenze: 1880.
『竹取物語』
38. Le curiosità di Jocoama: A. SEVERINI (tr.). Firenze: 1882.
『横浜奇談』
39. Il Giappone e il viaggio della corvetta magenta nel 1866: V. F. ARMINJON. Genova: 1869.
『日本と1866年のマジエンタ号の航海』
40. La ribellione di Masacado e de Sumitomo: Lodovico NOCENTINI. Firenze: 1878.
『将門純友謀叛伏誅語』
41. Cuor di samurai: Salvatore CHIMENZ. Yokohama: 1914.
『サムライの心』

[古地図]

1. Typvs orbis terrarum: Abraham ORTELIUS. Antwerp: ca.1570.
オルテリウス 『世界図』
2. L'Europe, suivant les nouvelles observtions...: Nicolas de FER. Paris: 1699.
フェル 『ヨーロッパ図』
3. La mer méditerranée divisée en ses principales parties,...: Nicolas SANSON. Paris: 1685.
サンソン 『地中海諸国図』
4. Fluriorum in Europa principis Danubu cum Adiacentibus regnis...: Johann Baptist HOMANN.
Nurnberg: 1730.
ホーマン 『バルカン、エーゲ図』
5. Switzerland and Northern Italy: H. van LOON. Paris: ca.1686.
ローン 『スイスと北イタリア図』
6. Gli stadi d'Italia: HOMANN (Heirs). Nurnberg: 1742.
ホーマン 『イタリア図』
7. Italia in suos statvs divisa,...: SCHAZ. Nurnberg: 1742.
シャッツ 『イタリア図』
8. Italia in suos statvs divisa,...: Giovanni Antonio Rizzi ZANNORI. Nurnberg: 1790.
ザンノリ 『イタリア図』
9. Status ecclesiasticus et magnus ducatsu Thoscanae: Corneilis DANCKERT. Amsterdam: 1690.
ダンケルト 『ローマ教皇領とトスカーナ公国図』
10. Regni Siciliae et insulae Maltae et Gozae: Theodore DANCKERT. Amsterdam: 1690.
ダンケルト 『シチリア王国とマルタ島、ゴザ島図』

日伊文化資料展示会
—「日本におけるイタリア2001年」を記念して—

展示目録

発行日 平成13(2001)年10月23日

編集 京都外国語大学附属図書館
発行 京都市右京区西院笠目町6
TEL (075)322-6027

【非売品】

